

# 鎌倉期における『源氏物語』梗概化の方法

— 古筆切を手がかりに —

中葉芳子

始めに

『源氏物語』の梗概本と言えば、『源氏大鏡』『源氏小鏡』がよく知られており、文学史などでも『源氏物語』の梗概化はこの両書に始まるとされている。『源氏大鏡』『源氏小鏡』はどちらも南北朝に入ってから成立と考えられるので、それまで『源氏物語』の梗概本はなかったことになる。

しかし、天理図書館蔵『源氏古鏡』や『源氏釈』の原型本とされる北野本は、ともに零本とはいえず、梗概本と考えられる。これらは鎌倉時代の書写になるものであり、鎌倉期にも梗概本が存在していたことがわかる。また、古筆切の形ではあるが、鎌倉時代に何種類かの梗概本が存在していたことも確認されている。

本稿では、今までまとまった研究がなされてこなかった、鎌倉期書写の『源氏物語』の梗概本の古筆切について、現時点での集成をし、それらの梗概化の方法を考えてみたいと思う。

## 一 梗概本の古筆切の認定方法

古筆切がまとまって掲載されているのは、『古筆学大成』<sup>1</sup>だが、そこで梗概本として掲出されている古筆切の中には、『源氏物語』中の和歌を集めた「源氏集」の切と考えた方がよいものがある。歌集であるか散文であるかは、和歌の書写形式で考えるが基本だろう。和歌が地の文より高い位置にあれば歌集、低い位置にあれば散文、と考えられる。もちろん時には例外もあり、天理図書館蔵『源氏古鏡』のように、歌集形式で書写され

ているが、内容的に見ると、歌集というよりは梗概本としてまとめられている、といったものも存在する。しかし、『古筆学大成』所収の古筆切については、和歌の書写形式で分類しても現在知られている切から見て、内容的に矛盾がないと考えられる。

そこで、『古筆学大成』を始め、『古筆切提要』、『源氏物語断簡集成』、『源氏物語関係古筆切資料集成稿』、『国文学研究資料館古筆切所収情報アータベース』などにより、鎌倉期書写の『源氏物語』の梗概本切をまとめてみると、何種類もの切が認められる。しかし、ツレが複数枚存している切は少ない。そこで、ここでは、比較的ツレが数多く集成できている、伝後伏見天皇筆切と伝二条為明筆切とを取り上げ、鎌倉期における『源氏物語』の梗概化の方法を探っていきたいと思う。

## 二 「源氏物語」の梗概本に関する古筆切の研究史

まずは、これまで『源氏物語』の梗概本の古筆切を対象として書かれた論文、解説などを確認しておきたいと思う。

最初に紹介されたのは藤井隆氏で、『本文系統が所謂別本系統に属すると思はれるもの』として、伝後伏見天皇筆切をあげている。この時点では、梗概本ではなく本文であると考えられて

いた。

その後、稲賀敬二氏が伝後伏見天皇筆切について詳しく調査され、『部分を略し、しかも辞句を新たに加えずに、筋をダイジエストしているのである』と梗概本であることを述べられ、「きわめて早い時期の物語梗概化の特色を備えているわけである」とされる。また、「やや時代が下ってからの梗概書とは違って、ことばを補ってダイジエストするのではなく、『源氏物語』原典の部分を略しつつも、原典のことばで梗概を語らせようとする態度である」とも述べられる。

さらに、『十四世紀初頭前後の源氏物語の享受形態は、五十四帖を丹念に読んで行く人の外に、梗概化されたダイジエスト版で源氏を鑑賞する人もいれば、筋よりも、歌とその詠まれた場面一つ一つに注目して源氏を鑑賞する人もあるというように、さまざまな享受形態が併存していたことになる』とも述べられ、鎌倉後期にはすでに『源氏物語』の享受形態としてさまざまな形が存在していたことも想定されている。

この稲賀敬二氏のお考えを受けた形で『古筆学大成』では解説がなされ、藤川晶子氏、田中登氏も伝後伏見天皇筆切に関して同様の見解を示している。

では、伝二条為明筆切についてはどうであろうか。最初の紹

介が「古筆学大成」の解説になるが、そこでは、「さきの⑦伝後伏見天皇筆切（二）」と同様、本文の大胆な省略が見られる。（中略）じつに大胆な省略が行われているのである」と記されている。

田中登氏も「処々語句を省略できる箇所は省略し、巧みに文章を続けていつている。注意すべきは、前述の大鏡や小鏡のよりに、編者による大幅な書き換えは行わず、極力原文の言葉を尊重する立場を貫いている点である。鎌倉時代における源氏物語梗概化の様相として、はなはだ興味深い資料といえよう」と述べられる。

また、鎌倉期の「源氏物語」の梗概本の古筆切については、池田一臣氏が「一葉一葉では大きな意味をもち得なくとも、類として源氏物語の注釈史・享受史の展開を究明するための、貴重な情報をもたらしてくれる」と述べられるように、完本が現存せず、零本でも二本だけという鎌倉期の梗概本にとって、古筆切からわかってくることも多いと言えるだろう。

### 三 伝後伏見天皇筆源氏物語梗概本切の梗概化の方法

以上のような先学のご研究を踏まえて、まずは伝後伏見天皇

筆切について見ていく。

- 1 けにさかりにはものしたまへとかきりありかし
- 2 兵部卿の宮もおはす右大将のさはかりおもりかに
- 3 よしめくもけふのよそひいとなまめきてやなくひ
- 4 などおひてつかうまつりたまへりいろくろくひけ
- 5 かに見えていと心つきなしいかてかはつくるひ
- 6 たてたるかほのいろあひにはたらむいとわりな
- 7 きことをわかき御心ちにはみおとし給てけりかうて
- 8 野におはしましつきて御こしと、め上達部

〔古筆学大成 第二十三卷〕 図版32)

これは行幸巻の冒頭近くにある、冷泉帝の大原野行幸の場面である。行幸の行列を見る玉鬘の視点で描かれた箇所と、行列が大原野に到着した箇所である。

当該箇所は、「源氏物語大成」では、八八六頁8行目〜八八七頁10行目に該当するが、省略されている箇所がある。断簡の1行目の後には、玉鬘の父大臣と冷泉帝を比較しての感想やお供の他の人々が冷泉帝と比較して目に入らない様子であること、冷泉帝と光源氏との酷似などが省略されている。これは、「源氏物語大成」で8行分に当たる。また、7行目「みおとし給てけり」の後には、冷泉帝を見た玉鬘が出仕のことを考えてもよい

と思う場面が省略される。これは、『源氏物語大成』で4行分に当たる。ただし、これらを省略した際に『源氏物語』本文以外の新たな表現を補うことはなく、話の内容がわかるように本文を抜き出している点に特徴がある。また、ある程度のまとまりをもって抜き出していることもわかるだろう。

もう一枚、確認のために見ておこう。

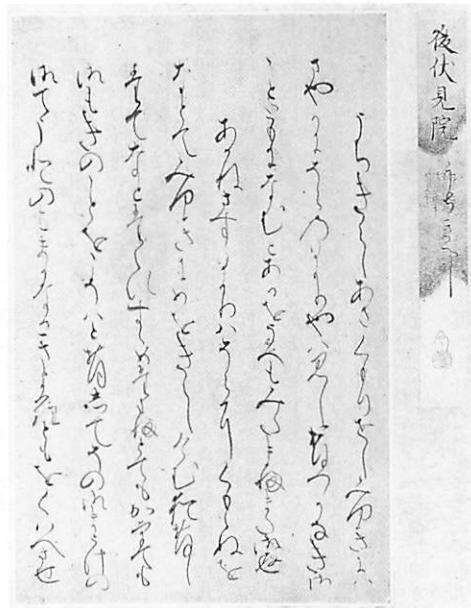
- 1 うちきらしあさくもりせしみゆきには
- 2 さやかにそらのひかりやは見しおほつかなき御
- 3 こともになむとあるをうへもみたまふまた御返
- 4 あかねさすひかりはそらくもらぬを
- 5 なんてみゆきにめをきらしけむ猶おほし
- 6 たてなとたえすす、めたまふとてもかうても
- 7 御もきのことをこそはとおほしてその御まうけの
- 8 御てうとのこまかなるきよらともをくはへさせ

〔平成新修古筆資料集〕第一集(四)

先に掲げたのと同様、行幸巻である。『源氏物語大成』では、八八頁11行目〜八八九頁7行目に当たる。行幸の次の日、玉鬘と光源氏との間で交わされた贈答歌である。

この断簡では、3行目「うへもみたまふ」の後に、光源氏と紫の上が玉鬘の冷泉帝出仕に関する会話をする場面が省略され

夜伏見院



ている。『源氏物語大成』では、7行分に当たる。

当該断簡を見ても、『源氏物語』本文以外の言葉を補うということはなく、内容がわかるように抜き出していることがわかる。これは、先に見たように、稲賀敬二氏を始めとしてすでに述べられていることではあるが、それが改めて確認できたと思う。

参考までに『源氏大鏡』と『源氏小鏡』を掲げておく。

御門、十二月に大原野へ御かりのため出させおはします。

御門の御かたちは、源氏の御かほをぬぎすべたるやうにう

つくしくおはしませば、それを見奉んとて、物見車うきはしのもとまでひまなし。あやしのかみをきこめたる山がつ、しづのめまでも、たうれまろびて出たり。あしよは車は、ながへをおしみじかれ、さまよふ。野におはしまして、ひらばり物まいりわたす。(中略)又の日、げんじより玉かづらへ御文あり。この比、大内より、玉かづらを内侍の督になし申たまへとしきりにめしあり。されど玉かづら、じたい申給ふを、昨日御門の御かたちのめでたきを御らんじて、さりとも、みやづかへもの、うくはおもひ給はじといふ御文なり。其御返に、玉鬘、打きらしあさぐもりせしみゆきにはさやかに空の光やは見しと、きこえ給へり。御返、げんじ、あかねさす光は空にくもらじをなとてみゆきにめをきらしけん。此巻に、御ち、うちのおとゞに、玉かづらの事を源氏申あらはし給へり。

〔源氏大鏡二〕

このまき、みゆきといふ事。このきやうかうは、の、きやうかうの事なり。さて、みゆきといふ。しゆしやうは、かのけんしの、しのひの御こ、れいせいめんにて、おはしましき。ころ十二日なり。をはらのへ、みゆきし給ひしなり。たかかりなれば、そのことは、

みゆき。をはらやま。雪。きし。ふるきあと。

など、いふ事、あるへし。

〔源氏小鏡二〕

伝伏見天皇筆切と「源氏大鏡」「源氏小鏡」とは梗概化の方法が全く異なることが確認できたと思う。

四 伝二条為明筆源氏物語梗概本切の梗概化の方法

次に、伝二条為明筆源氏物語梗概本切について見てみる。

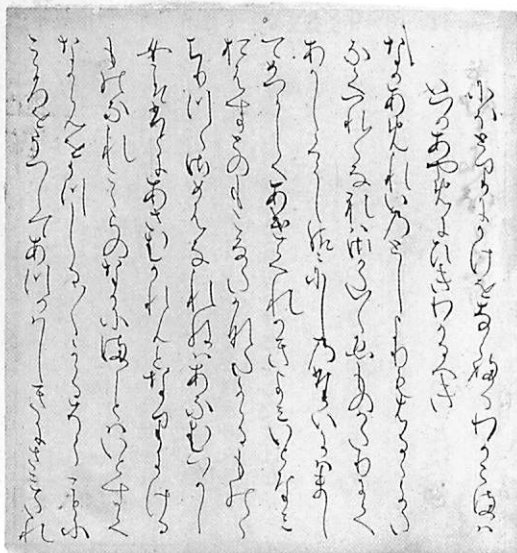
- 1 はて、なにともみえずなりぬとねり
- 2 ともよろしくしな／＼たまふいたう夜
- 3 ふけてひと／＼みなあかれ給ぬればを
- 4 と、はこなたに御とのこもりぬいまはおまし
- 5 などもこと／＼にて御ものかたりなときこへ
- 6 給今日のめつらしかりつることはかりをそこ
- 7 のまちのおほえあるかしとおほしたりはな
- 8 ちるさと
- 9 そのこまとすさめぬくさとねにたてる
- 10 みきはのあやめ今日やひきつる
- 11 おほとかにきこへ給なにはかりのことにもあ
- 12 らねとあはれといおほす

- 1 にはとりにかけをならふるわかこまは
- 2 いつかあやめにひきわかるへき
- 3 なかあめれいのとしよりもはる、かた
- 4 なくつれくなれは御かたくゝゑものかたりにて
- 5 あかしくらし給ににしのたいにはまし
- 6 てめつらしくあけくれかきよみいとなみ
- 7 おはすともこなたかなたかゝるもの、
- 8 ちりつ、御めはなれねはあなむつかし
- 9 女こそひとにあさむかれんとなりける
- 10 ものなれこゝらのなかにまことはいとすく
- 11 なからんをかつしるくゝかゝるそらことに
- 12 こゝろをうつしてあつかはしきにさみたれ

〔平成新修古筆資料集〕第四集 九三

二枚の古筆切が連続している箇所である。蜚巻で、五月五日、六条院の夏の町で競馬がおこなわれた日と、その夜の光源氏と花散里との会話の場面、後日の物語論の始まりの場面である。『源氏物語大成』では、八一三頁11行目く八一六頁6行目に当たる。

この断簡で省略されているのは、まず、二枚目の2行目の和歌の後に、光源氏が花散里と寝所を別にすることを嘆く箇所が



省略されている。二枚目3行目からは、5行目の「あかしくらし給」の後、6行目の「めつらしく」の後、7行目の「いとなみおはず」の後、とかなり細かく省略と抜き出しを繰り返している。前述した伝後伏見天皇筆源氏物語梗概本切と比べると、梗概化の相違点として浮かび上がってくるだろう。

また、一枚目の4行目「御とのこもりぬ」の後に、光源氏と

花散里が競馬の出席者を批評する場面が続くが、断簡ではそれを「いまはおましなともことくにて御ものかたりなときこへ給」とまとめて表現している。こういった省略箇所をまとめた表現は、頻繁に見られるものではないが、この古筆切の特徴だと言えるであろう。

そうかといって、「源氏大鏡」や「源氏小鏡」と同様の方法で梗概化しているとは言えない。参考までに掲げてみると、

五月五日の御あそびは、夏の御かたにあり。くらべ馬のせらる（手つがひ手まどはし付べし。手まどはしとはくみて落る有様也。）（夏の上）、その駒もすさめぬ草も名にたてる汀のあやめけふや引つる。源氏、には鳥にかけをならぶるわか駒はいつかあやめに引わかるべき（すさめぬはくわぬ也。わかごまとはいへどもわかごもの事とぞ）。

（「源氏大鏡」）

「源氏小鏡」

該当箇所ナシ

となる。「源氏大鏡」では、競馬の記述はあるが物語論には全く触れられておらず、「源氏小鏡」いたっては、この断簡に該当する内容は梗概化されていない。やはり伝二条為明筆切も、「源氏大鏡」「源氏小鏡」とは梗概化の方法が異なると言える。

## 五 最後に

以上のように、伝後伏見天皇筆源氏物語梗概本切と伝二条為明筆源氏物語梗概本切とを考察してきた結果、鎌倉期の梗概本とはいっても、まったく同じような方法で梗概化しているのではないということがわかる。

それでは、なぜ異なる方法の梗概本が存在するのだろうか。ここで一つの参考になるのが、伊井春樹氏のご考察である。

「二言抄」（和歌所へ不審条々）によると、

むかし藤谷殿にて、八代集を人々に、四季、恋、雑、六首を、各の好の歌を撰られ候て持参して詠吟候て、御沙汰候ける。又は光源氏の巻々を、人々に闡をとらせられ候て、其巻のやうを書いだして、よしあしを御沙汰候けり。此等も只、物をこまかに見せられ候はむための事と承及候。是は阿仏の禪尼の御張行候て、西円など申ける才学の輩なども入て候けるとかや。か様の事も常に御沙汰ありたく存候にて候。

と、興味深い阿仏尼主催による研究会が催されていたように、八代集から好みの歌を四季・恋・雑と六首抜き出し、それぞれの優劣を競いあうとともに、「源氏物語」の巻々を

くじ引きにし、担当する巻の内容を書き出し、そのよしあしを論じることもしていたという。「其巻のやう」とするの  
で、詠作用の和歌や歌語をもちこんだダイジェスト的な内  
容を各人が作って持ち寄り、そのできばえを批評しあつて  
いたといい、それは「源氏物語」を「こまかに見」る訓練  
が目的だった。それもひとえに和歌の詠作に資するため、  
その場では歌ことばの問題、故事、出典、難語なども語ら  
れていたに違いなく、後の注釈書への影響とともに、やが  
て大量に生まれてくる「源氏小鏡」などの梗概書の先蹤的  
な存在であつたといえる。<sup>17</sup>

「其巻のやう」がイコール梗概と断定するわけにはいかないが、  
伊井氏も述べておられるように、「源氏小鏡」などの梗概書の  
先蹤的な存在であつた」とは考えられないだろうか。

ここでもう一つ参考になるのが、「源氏集」について述べられ  
た田中登氏のご論である。

以上、見てきたごとく、平安末期にはすでに成立を見て  
いたと思われる「源氏集」は、詞書を持つものと、持たな  
いもの。また、その詞書も、物語の語り手に密着したもの  
もあれば、語り手とはかなり距離を置いたものもある、と  
いつた次第で、そもそもその成立当初から、種々の相がある

ことが明らかとなつた。室町時代の歌僧正徹は、童形の求  
めに応じて、「源氏物語」の和歌の抜書本を与えているが、  
その折のことを、「なぐさみ草」に次のように記している。

抜書の歌は、所々に多かるべきを、さやうの本もなけ  
れば、歌ばかりをと思ひ侍りながら、あまりに故知り  
がたきなるべければ、あるいはかの物語の言葉を拾ひ、  
あるいは十が一の心をあらはして記しつけぬ。

これによれば、「源氏集」というのは、享受者のレベルに  
より、あるいは関心の度合いによつて、種々様々なもの  
ありえたことが知られよう。したがつて、これこそは「源  
氏集」の決定版といつたようなものは、むしろなかつたと  
考えるべきなのであろう。<sup>18</sup>

平安末から鎌倉時代にかけての古筆切が残る「源氏集」にお  
いて、享受者のレベル、関心の度合いによつてさまざまな形  
態のものがあり、「源氏集」の決定版といつたようなものはなかつ  
たと考えるべきだろう、というご指摘はそのまま鎌倉期の梗概  
本にも当てはまらないだろうか。

これらの伊井氏と田中氏が考察されたことを考え合わせると、  
次のように考えるのがよいように思われる。それは、梗概本は、  
各家々もしくは各学問グループなどが、それぞれ自分たちの関



心に応じて自分たちなりの梗概本を作り、そしてそれはお互いに書写し合うものではなかったために、さまざまな方法で梗概化された梗概本が古筆切として残っているのではないか、ということだ。

今後、伝後伏見天皇筆源氏物語梗概本切と伝二条為明筆源氏物語梗概本切が更に集成されたり、この二種以外の梗概本切が複数枚見出され考察に耐えうる枚数の古筆切が集まったりすることで、より詳しい鎌倉期の梗概化の方法が明らかになってくることを期待したいと思う。

〔注〕

- (1) 『古筆学大成』第二十三卷(講談社、平成四年六月)
- (2) 伊井春樹・高田信敬編『古筆切提要』(淡交社、昭和五十九年一月)
- (3) 久曾神昇編『源氏物語断簡集成』(汲古書院、平成十二年十二月)
- (4) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」(『本文研究 考証・情報・資料』第六集 和泉書院、平成十六年五月)
- (5) 国文学研究資料館(<http://www.nijiac.jp/>)古筆切所収情報データベース

(6) 藤井隆「源氏・狭衣物語古筆切について」(『久曾神昇博士還暦記念研究資料集』風間書房、昭和四十八年五月)

(7) 稲賀敬二「源氏物語古筆切の形式と方法——後伏見院筆切、伝西行筆切など——」(『水荃』四号 昭和六十三年三月)

(8) 藤川晶子「四 後伏見天皇 四半切(源氏物語)」(『平成新修古筆資料集』第一集 思文閣出版、平成十二年三月)

(9) 田中登「物語古筆切研究覚書」(『平安文学の新研究——物語絵と古筆切を考える』新典社、平成十八年九月)

(10) 田中登「九三 二条為明 六半切(源氏物語)」(『平成新修古筆資料集』第四集 思文閣出版、平成二十年九月)

(11) 池田和臣「国文学古筆切資料 源氏物語注釈書・梗概書の古筆切」(『中央大学文学部紀要』第百九十九号 『文学科第九十三号』平成十六年三月)

(12) 池田亀鑑編著『源氏物語大成』中央公論社

(13) 注(8) 掲出書

(14) 『源氏大鏡』の引用は、『源氏大鏡 訂正版』(古典文庫 508、平成元年二月)による。

(15) 『源氏小鏡』の引用は、岩坪健編『源氏小鏡』諸本集成(和泉書院、平成十七年二月)所収の第一系統第一類 伝持明院基春筆本による。

(16) 注(10) 掲出書

(17) 伊井春樹「中世における『源氏物語』享受史の構築」(『源氏物語論とその研究世界』風間書房、平成十四年十一月)

(18) 田中登「源氏集」の種々相」(『源氏物語の展望』第六輯 三弥井書店、平成二十一年十月)

貴重な資料の写真掲載をお許しいただいた、田中登先生に御礼申し上げます。

なお、本稿は、平成二十二年六月二十六日、同志社大学においておこなわれた中古文学会関西西部会第二十二回例会における口頭発表に基づくものです。席上、御教示を賜りました諸先生方に心から御礼申し上げます。

〔追記〕脱稿後、『古典籍展観大入札会目録 平成十七年』に「5 源氏物語切 後伏見院筆」として掲載されている切が、伝後伏見天皇筆源氏物語梗概本切(桐壺巻冒頭、五①～②)であることがわかった。

(なかば よしこ)／本学東西学術研究所非常勤研究員

伝後伏見天皇筆源氏物語梗概本切（鎌倉時代後期書写） 集成

1	桐壺卷	古筆学大成第23卷 図版357	25.5×16.5	7行	27⑤～28⑤	
2	花散里卷	源氏物語断簡集成 第1部 57	25.7×16.9	8行	389③～⑦	「古筆学大成」釈文
3	須磨卷	源氏物語断簡集成 第1部 58	25.5×14.8	7行	401②～⑥	
4	須磨卷	古筆学大成第23卷 図版347		8行	435②～⑥	
5	須磨卷	国文学古筆切入門 85	25.6×14.3	7行	435⑪～436⑤	
6	松風卷	古筆学大成第23卷 図版348	25.6×16.8	8行	584③～⑦	
7	松風卷	源氏物語断簡集成 第1部 59	25.6×12.8	6行	584⑧～586⑥	
8	松風卷	書画 蒐集と鑑賞 2号-37	26×17	8行	590⑫～591③	
9	松風卷	古筆学大成第23卷 図版349		4行	595③～⑥	
10	朝顔卷	古筆学大成第23卷 図版358		8行	644⑤～645⑨	
11	朝顔卷	古筆学大成第23卷 図版359		8行	657⑦～⑪	
12	初音卷	平成新修古筆資料集 第2集 5	25.0×14.1	7行	765⑩～766②	
13	胡蝶卷	高城弘一氏無銘手鑑A			782④～⑥	未見(小林強氏による)
14	胡蝶卷	古筆学大成第23卷 図版350		8行	790⑧～⑬	
15	常夏卷	古筆学大成第23卷 図版351		6行	836③～⑥	
16	篝火卷	古筆学大成第23卷 図版205	25.6×12.1	6行	856⑪～⑬	
17	行幸卷	古筆学大成第23卷 図版352		8行	886⑧～887⑩	
18	行幸卷	平成新修古筆資料集 第1集 4	25.6×16.5	8行	888⑪～889⑦	
19	行幸卷	出光美術館蔵品図録録 書 2-20	24.8×16.3	8行	895⑭～896⑫	
20	藤裏葉卷	当市上京栗辻氏所蔵品入札目録 大正7年11月28日			997①～③	未見(小林強氏による)
21	藤裏葉卷	古筆学大成第23卷 図版353	25.6×16.4	8行	1004⑤～⑩	「古筆手鑑大成13」
22	藤裏葉卷	古筆学大成第23卷 図版360	25.5×16.5	8行	1015①～⑪	「徳川黎明会叢書 玉海」
23	柏木卷	源氏物語断簡集成 第1部 60	25.4×16.4	8行	1232⑩～1233⑦	
24	柏木卷	古筆学大成第23卷 図版354		8行	1253①～1255⑧	
25	夕霧卷	金刀比羅宮蔵手鑑古今筆陳		8行	1313⑫～1314③	
26	夕霧卷	男爵神田家及某大家所蔵品入札目録-46		8行	1314③～⑨	図版不鮮明
27	夕霧卷	古筆学大成第23卷 図版355		7行	1373⑨～⑬	
28	御法卷	古筆学大成第23卷 図版361		8行	1383⑬～1384⑤	
29	御法卷	古筆学大成第23卷 図版356		7行	1393⑧～1394③	

伝二条為明筆源氏物語梗概本切（鎌倉時代後期書写） 集成

1	薄雲卷	古筆学大成第23卷 図版363		11行	607⑪～608②	
2	薄雲卷	古筆学大成第23卷 図版364		11行	611⑩～615⑤	
3	玉鬘-初音卷	筆林 表-24	16.4×15.8	10行	757①～764④	
4	初音卷	平成新修古筆資料集 第2集 90	16.9×15.9	12行	764④～⑩	
5	蛭卷	古筆学大成第23卷 図版365		12行	813⑪～815②	
6	蛭卷	平成新修古筆資料集 第4集 93	16.5×15.7	12行	815③～816⑥	
7	篝火卷	源氏物語断簡集成 第1部 68	16.9×16.0	12行	856⑬～857⑨	
8	真木柱卷	古筆学大成第23卷 図版366	16.6×15.8	12行	947⑫～948⑩	「古筆手鑑大成13」
9	藤裏葉卷	京都古典籍・古書画資料目録 1号-174	17×16	12行	1005①～1008⑫	